２０１４年６月号・季刊４５号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館　松居友

ＭＣＬの原点は絵本の読み語り
本部に住み込んでいる子どもたちが、先住民や
イスラムの貧しい村の子達にお話をする。
子どもや若者たちが、種族や宗教の異なった
別の集落の子どもたちに出会って絵本を語り、
昔話を語り。ともに踊ったり歌ったり・・・。
上の写真後ろにいらっしゃる、御茶ノ水女子大
で幼児教育を教えられている菊池先生曰く。
「現地の子どもにとっても、すばらしい体験。
でも親がいなかったり、複雑な問題を抱えて
ＭＣＬにやってきて奨学生になった子どもや
若者たちにとっても、自信がつくし、
他部族や他宗教の子達の状況を理解でいるし。
すばらしい自己実現の機会ですね！」
でも、絵本はお金のある先進国の産物で
外国から来たものがほとんど。
おおかた都会の豊かな生活が舞台
現地の僻村の現状とは隔世の感があり、
都会や外国へのあこがれを高めるばかりで、
貧しくとも心の豊かな
彼らの生活が少しも描かれていない。
そこで、思い切って、ＭＣＬで、
貧しくとも愛にあふれた村の子達の
生活が舞台となった絵本を作り、
現地の子達には無償で配り。
逆に、物は豊かでも自殺やいじめが蔓延し、
心の貧困になやんでいる、
日本の子どもたちや大人やお年寄りに、
ミンダナオから、愛の風を送ることに決めた。
年一回、機関誌に代わって・・・

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

次世代の若者たちを育てる場

ＭＣＬのこれからの１０年のテーマは、農業と文化。文化活動の一貫として、従来の機関誌の発行とともに、現地の生活や文化、民話を題材にした、絵本やドキュメンタリーの制作を視野に入れています。

若者たちと民話を収集、絵本の画家や作家、編集者を育てたり。自由寄付を活用して、絵本を見たこともない現地の子どもたちに、自分たちの生活が舞台になった絵本を無償で提供し、たとえ貧しくとも豊かな心の素晴らしさを認識してもらうのが目的です。

それと同時に、現地の出版社や日本や海外の編集者とも協同して、日本をはじめ海外の多くの子どもたちにも、素晴らしいミンダナオの子どもたちの世界を伝えていく予定です。

機関誌希望の方は、わずかでも自由寄付をお送りくだされば登録します。「機関誌を生きがいにしている」という手紙をよく受け取ります。

お年をめして、一人暮らしだったり経済的に厳しい方には、寄付無しでもお届けします。喜んで読んでいただけるだけで幸い！　不要な方は、メールか日本窓口にファックスでご一報ください。裏面に記載してあります。

これからのミンダナオ　子ども図書館のビジョン

６月６日、一か月の日本滞在をへて１０日にミンダナオに帰れる！

子どもたちが大喜びで迎えてくれるだろう。

「パパともー。お帰りなさい！」

「パパともが、いなくて、とってもさびしかったよー。」

ぼくにとっても、子どもたちがいない日本での寂しさから、ようやく解放されて、底知れぬ解放感と安らぎに心底満たされる時が帰ってくる。

「やれやれ、どんなにひどい状況でも、可能な限り、ぼくはここに留まって、この子たちと生きていくための道を選ぶだろう。」

卒業式から帰ってきたＭＣＬの子どもたち

戦闘緊急時にスタッフたちはダバオに避難させることはあっても、僕はここに残り、生涯をここで終えようと思っている・・・が、今回の滞在で、日本の子どもや若者たちを見ると、やはり同様に可愛くて、自殺やいじめや孤独死のなかに、子どもたちを放っておくことはできないと感じた。

日本でも貧困で学校にいけない子供たちがいるというのに、お金はあるのに、近所の人たちが助けようともしないのだという。

そんな日本の子どもたちの現状を見るにつけて、そしてとりわけ、心に孤独や問題を抱えてミンダナオに来た若者たちが、見事に立ちなおっていく様子を見るにつけても、日本の子どもや若者たちのために、活動を開始しようと決心した。

１０年間、ミンダナオの子どもたちのことのみを考えて生きてきたが・・・。

今回、日本の子どもたち、若者たちを見て思ったのは、彼らがとても素直で良い感じだと言うこと。

今回の日本滞在中に、大人だけではなく、大学や学校の青少年、若い親たちにも会って語りかけてきたし、現に目の前にしている子どもたちを注意深く観察もしたが、予想以上に、子どもたちの目や心は素直で良い。

しかし、逆に、あまりにも素直だから、自分や家庭、学校や仕事、ひいては国家という、人間の意識の中で作られた枠組みから、外へ踏み出すきっかけを失っているようにも思う。

ここ数年、大学や、時には中学生や高校生、はたまた小学生の若者たちに話す機会が増えてきた。

とりわけ、大学では、インターナショナルな感性を持った若者たちを育てる必要が要求されているようで、しかも、ただ英語が話せるといった、欧米型の子どもたちではなく、アジアやアフリ

アポ岳（２９５０）山中で出会った山の子どもたち

カの文化にも、柔軟に溶けこんで、友情のなかで活動できる若者たちの育成（アジアの日本人リーダーを育てるといった、馬鹿げた発想も若干あるが）を視野に入れた教育の必要性が声高に語られ始めたようだ。

今の若い世代が、良い感じなのは、少子化により競争原理が教育の中で薄れたからか？

しかし既定の枠組みから、一歩踏み出せないのは、相変わらず詰め込み主義で、自分で考えて行動する楽しさを知らせられてないのと、遊ぶ時間が足りないからか？

小学校を卒業して、これからハイスクールに進学！

ミンダナオと日本の大きな違いは、子どもの数と貧富の度合いだ。

ミンダナオは、平均して7名の子どもが山では普通で、子どもを見ない場所はない。

先日、山梨県の韮崎市に行ったが、日本では、地方都市でも街中でも村でもどこでも、公園ですら、子どもどころか歩いている大人の姿すらない。まるで町が死んでいるように見える。これは寂しい風景だ。

ミンダナオは、子どもの数がべらぼうに多いから、大変な競争社会、貧困のなかでの、生きるか死ぬかの闘いの場所かというと、ぜんぜんちがう。

子どもの多い家庭の場合、家族がみんなで協力して、一人でも小学校や中高校を卒業させてあげようと努力する。それは、MCL（ミンダナオ子ども図書館）で奨学生になって、学校に行きたい子の理由がほぼ全員、「家族を助けたい、兄弟姉妹を助けたい」という点からも理解できる。

貧しいからこそ、競争するのではなく、貧しいからこそ助け合う。

「落ちこぼれたって、それはそれで良いじゃない。友達であり、家族であり、仲間であることには変わりないんだから・・・」

ミンダナオ子ども図書館の奨学生は学歴ではなく、親のない子を優先しているから、優等生ばかりではないけれど、成績の良い子も悪い子も、みんな仲良く暮らしている。そして、成績の悪い子も、高校を卒業すると（たとえ中退したとしても）運転や裁縫の技術コースに行かせてあげる。

よく学校の先生から言われる。「MCLの奨学制度は、変な制度ですね。トップクラスの子もいるけど、まったく勉強のできない子もいますねえ。」

僕自身は、学力にそれほど価値を置いていない。大事なのは、どんなに学力の違いがあっても、友情と愛の中で家族として、兄弟姉妹として、力を合わせて生きていくことだと思う。

むしろ学校教育の場において、競争原理と点数主義、勝ち負けのゲームで育ったエリート世代が恐ろしい？

そんなMCLの子どもたちの姿を話し、映像で見せると、今の日本の若者たちはとても感動し、心が開かれて、未来に向かって純粋に踏み出そうと感じる、そのときの様子がとっても良い。

子どもたち、そして10代、20代、30代は見ていてもすがすがしいが、素直さ故に心が沈み、閉じこもってしまう気持ちも良くわかる。

これは、ウエッブサイトの「ミンダ

ナオ子ども図書館日記」にも書いたが、ぼくの小学校、明星学園は、点廃主義で4年生まで学期末試験がなく、通信簿がなく、成績で優劣をつけない教育方針だった。

無着成恭先生、理科の遠藤豊先生、数学の松井幹夫先生からは、知識の詰め込みではなく、自分で考えて、たとえ間違っていても恐れずに発表する楽しさを学んだ。

たとえば1×0は、0だという知識を単に頭に詰めこむのではなく、1（一つあるもの、例えばリンゴ一つ）に0をかけると、なぜ0になり、有ったはずのリンゴがなくなるのか？？？？それをグループで議論させて発表させる。大事なのは、知識を詰め込むことではなく、考えて発表すること。考えることによってはじめて、掛け算の意味がわかる。

教育では、クラブ活動が重要だと言われるが、僕は必ずしもそうは思わない。大事なのはむしろ遊びで、ゲームは二の次ではないだろうか。

ゲームと遊びは根本が違う。サッカーも野球もバスケットも、社会的（大人の作った）ルールのなかで点数により勝ち負けを競う。

遊びとは、花いちもんめや鬼ごっこやかくれんぼ、ハンカチ落としや縄跳びのように、点数ではなく、子どもたち自身が作った楽しい仲間の交流だ。

遊び場は、体育館や運動場ではなく、学校や保育園や幼稚園のなかでもなく、家でゲームをするのでもない。

本当の遊び場は、外の「ちまた」で、時には森や林や川。

まさにミンダナオ子ども図書館の子どもたちが、樹上で果物をとり、川で泳ぎ、はないちもんめ、はんかちおとし、のような伝統的な遊びをする姿を見るとわかる。彼らが来た、山の集落に泊まってみるともっとわかる。そうした「ちまた」で子どもたちが友情を築いていく、そんな姿が日本にはない。

しかし日本の子どもも若者も、友情や愛のすばらしさはわかっている。それだけに、素直にそれを感じ取るとき感動し、自分の生きる道が見えてる？特に映像だけではなく、本当に現地に来てみると！

日本には、さまざまな商品があふれていて、お金さえ出せば美味しいものが食べられるけれど、ちっとも幸せが感じられないのはなぜだろう。

東京ではミンダナオとは異なって、全員が一丸となって真っ黒な服を着て会社に向かう中高年が不気味だった。自分たちがリーダーになったつもりで、他国を競争相手や敵と見なし、勝つことだけを考える？？？

一丸となって、戦争に向かわなければ良いのだが・・・・

今回行って話した、大阪府立大学の若者たちの感想です。

参加者A

ミンダナオでは今でも緊張状態が続いているとの話を聞いたことが一度もなく、驚いた。

奇形を持つ子が多いことも知り、写真に釘付けになった。

どこの国でも人気のあるアイドルがいることはかわらず、KーPOPがフィリピンで人気というのは前から知っていたので、松居友さんに確かめられてよかった。

参加者B

ますます現地に行こうという気持ちが湧いてきました。

僕が感じたこととして、同じ人間なのにこんなにも過酷な状況におかれている子たちがいるんだなと、心を打たれました。

また、そんな状況の中でも子供たちは良い笑顔をしているなと思いました。あと、ミンダナオの自然はものすごくキレイというか、壮大だなと思いました。

参加者C

初めはフィリピンのことは正直あまり知らなくて、考えたこともありませんでしたが、実はこんな身近なところに全く違う世界があるのだと実感しました。

特に印象的だったのは、戦争がフィリピンでも起こっているということと、大量の森林が伐採されていて、その多くが日本に来ていたという話です。

戦争なんて遠くでやっていて自分には関係ないと思っていたので、とても衝撃でした。しかもそれが他国の計画的なものだというのはとても理不尽で、おかしいことだと思いました。

日本の森林はとても豊かですが、そこには実はフィリピンの犠牲が背景にあるなんて全く知らず、日本も影で他国に被害を与えていたなんて、と考えずにはいられません。

松居友さんのお話のおかげでフィリピンにとどまらず、貧困とはどういうものなのかを少しは学ぶことができたと思います。それでもやはりお話だけでは感じられなかった部分もあり、それを知るためにも、ぜひともフィリピンには行きたいと思っています。その時はよろしくお願いします。

参加者D

貧困な人が多くても自殺が少ないこと、孤独な人や落ち込んでいる人をそのままほおっておかないこと、素敵だなと思いました。特に、落ち込んでいる人をほおっておかず、必ず誰かが声を掛けること、大きいと思いました。

日本では、誰かを助けようとすることは偽善だとか、誰かに助けを求めることは甘えだとか言われてしまうように思います。

自分だけではどうにもならないときや、誰かの力を少し借りられればどうにかなること、少し声を掛けてもらうだけで救われることはたくさんあると思います。

当たり前のように助け合えることがすごくいいなと思いました。

戦争がなくなればいいなとすごく思いました。その地の人々を実際には知らない人たちによって引き起こされてしまうのだろうなと悲しかったです。親を亡くすのはとても悲しいことだと思います。

どうしようもない理由ではなく、戦争によって親を殺されてしまうのは、もっと悲しいと思います。

２ヶ月日本にいると子どもたちが恋しくって、１ヶ月ずつにしたという話をされたのが印象的で、

私も活動で関わっている、週に一度しか会えない子どもたちが毎日恋しいです。どうしても予定が入ってしまうと、週に一回すら会えないことになってしまいます。

私もたくさんの子どもたちと家族として暮らす松居友さんのような暮らしにとても憧れます。

実際に行って感じたいこと知りたいことがたくさんだなあと思いました。ありがとうございました。

メール：mcl.v.staff@gmail.com（現地日本人スタッフ）
電話番号：080-4423-2998（日本国内から現地に転送・松居友）
09219603640（現地携帯電話・松居友）
mcltomo@yahoo.co.jp（松居友へメール）

訪問者の方々の思いで

ミンダナオ子ども図書館が発足して10年間、ほとんど現地の日本人は、ぼくひとり。運転手もいなかったから、峻険な山道を時には川をわたり、現地の若者たちを乗せて、読み語りや医療活動を行っていた。

ふっとジャングル地帯を走りながら、「なぜこんなところに、日本人がたったひとりでいるのかな?」と不思議な気持ちにとらえられたこともあったけれども、子どもや若者たちと一緒なので帰りたいとも、寂しいとも感じたことはない。

むしろ最近は日本に帰ると、なぜか強い孤独感にとらえられ、早く現地に帰りたいと思う。

しかし、現地の子どもたちの事だけ考えてやってきた時が過ぎて、あらためて日本の子どもたちの状況を見たり、自殺やいじめ、不登校や引きこもりの様子を聞くと心が痛み、最近思い切って特に若者たちをMCLに受け入れることを考えるようになった。

親子連れで最初にMCLにいらしたのは、おそらく京都宮津の暁星高校の仁科先生ご一家だろう。まだ一年生になるかならないかの娘さんと来られて本当に楽しい時を過ごされた。今もおつきあいが続いている。

それから思い出に残るのは、立正佼成会の親子の訪問。中学から高校生の若者たちだが、一緒に海でも遊んだし、マノボ族の村で平和の祈りもし、別れの時には涙涙。そうそう、カガヤンデオロからバスで、創価学会の大学の若者たちも二人来たことがあった。

しかし、もともと日本人の受け入れを考えて活動していなかったし、現地は日本政府指定の危険地域だし、現地活動が忙しく特別に世話するのは面倒だし、一度はスタディーツアーも実行したが、参加者も料金を払うとそれなりの期待や見返りを持つようだし。お客さまとしてお迎えしても、どことなく不自然で、日本の若者にとっても、現地の子どもたちにとっても、良い影響がないような気がしてやめてしまった。

今でも、滞在者に宿泊費、滞在費その他を求めていない。兄弟姉妹として、また家族として受け入れているから。

ただ、往復の送り迎えや食事代だけでも結構費用はかかるので、それを支援者の皆さん方のご寄付でまかなうわけですから、心ある皆さん方は自由寄付を置いて帰って行かれる。

しかし、若者たちの場合は蓄えがあるはずもなく。その子の将来を考えると、数か月ボランティアで手伝ってもらいながら、ときには居候をさせてあげたりもしている。寄付者の方々、日本の若者たちの若干の受け入れ、ご容赦ください。

ただ、すでにミンダナオ子ども図書館を支援してくださっている方々の場合は、子どもたちにとっても親のような方なので、その子の村や家を訪ねるようにしている。

しかし、日本の訪問者にとって、MCLの子どもたちに会ったり、村の子どもたちに出会ったり、マノボの村に泊まらせてもらい、子どもと一緒に滝に泳ぎに行ったり、読み語りに村を訪ねたり。普段のスタッフの活動に同行したりすることだけでも特別で、すごい体験になるようだ。

左の写真は、御茶ノ水女子大・初等幼児教育学科講師の菊池先生。

毎年、講義をしていたら、一番上の

写真の里美さんと民希さんが友人たちと来られた。その後、民希さんはＭＣＬに残り、今はボランティアスタッフとして働いている。お姉ちゃんはお茶大の修士だけれど、一年休学してダバオでタガログ語を学んでいる。

菊池先生は、お茶の水女子大学で教鞭をとり、猛烈にお忙しいのだけれど「どうしても、来たくて来たくて」数日の時間を割いて飛んでこられた。現地の子どもたちの姿に魅せられた。

右ページの二段目の写真は仁科先生。京都暁星高校では、マノボ族のアルベルト君などのスカラシップ支援をしていたが、彼は今スタッフとして活躍している。

アルベルト君は、かつて日本に招かれて、高校生たちと踊りをおどったり、ウオーカソンというプロジェクトに参加したりした。保育所もずいぶん寄付してくださった。

右ページの３段目は、愛知の井上幼稚園の先生。マノボのキアタウ村で泊まり、子どもたちと遊び、ゴムの木の植林も手伝った。その体験が素晴らしかったようで、その後も井上幼稚園の別の先生方が年末ＭＣＬに訪れられた。

さすがに幼稚園の先生方で、子どもと遊ぶ距離が違う。言葉が通じなくてもあっという間に友達になる。

先生方にとっても、テレビも電気もない山の子どもたちと、伝統的な遊びをすることで、ずいぶん教わることが多かったようだ。

左上の写真は、同じマノボの集落キアタウ村で、子どもたちと遊び、植林活動を手伝った同志社大学の若者たち。

キアタウ村は貧しい集落で、家によっては竹の小屋。しかし、美しい壮大な風景が広がる高台にあり子どもたちは可愛くて、人々も親切。

左の車いすの方は、障碍者カヌーで有名な・・・・さん。野田知祐さんたちとユーコン川を下った。いつかきっと、野田さん方ともいっしょに、イスラムのリグアサン湿原地帯をカヌーで下ろうと思っている。巨大な鯉や雷魚やウナギを釣ったり、ワニの背中にまたがったりしながら・・・？

キアタウの宿泊体験はおすすめ。

現地の酋長から、貧困対策の一つとして、「セキュリティーを保障するから宿泊できるようにしたい」という申しでがあり、実行に移した。

ただし宿泊客は一軒に一人とし、うちのスタッフが必ず同宿。すべての家々に順次平等に泊まることとし、家に一泊１０００ペソ、共同体には何泊しても１０００ペソだけを払うことになっている。

共同体に支払うお金を貯蓄して、今は水道施設のパイプを引いた。

ここから２０分も斜面を下ると谷川にでる。ここで子どもたちと洗濯したり泳いだりすると、とっても楽しく充実している。

また、村人たちと総出で、ゴムの木の植林などをするととても素晴らしい経験となる。

植林は、２ヘクタール分６００本で６万円の寄付で可能。

左の写真は、前にも一度紹介したが、有名な焼き畑人類学者の増田氏。

日本の焼き畑を研究して本を出した後、現在は、フィリピンの先住民の焼き畑の研究書を執筆している。

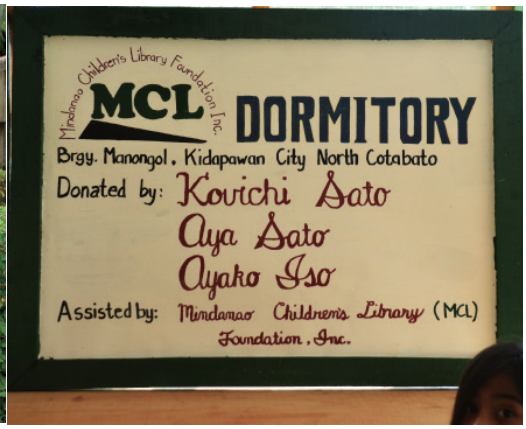
専門の文化人類学者にとっても、この地は特別な場所で、ことしも再び調査に来られる予定。ミンダナオは、民族文化の宝庫なのだ。

全員がいっしょに食べられる食堂と台所と宿舎も出来た！

念願の１２０名全員が一緒に食べられる食堂が出来ました。伴野正夫様のおかげです。開所式当日はお越しになり子どもたちと一緒にお祝いしました。上の左の写真が伴野様。

当日は、ＭＣＬ日本窓口の前田容子さんも、桃山学院学長をなさっているご主人と参加。楽しい時を過ごされました。上の写真右がご夫妻。

食堂は、フィリピン政府の福祉局の基準に合わせた設計で、すでに法人資格はとっているのですが、これから順次福祉局の認定基準を満たし、認定法人にしていくための一歩です。



食堂の二階は子どもたちの宿舎です。宿舎を寄贈してくださったのは、磯綾子さま、佐藤浩市さまと奥様の佐藤亜矢さま。亜矢さまは、ミンダナオ子ども図書館を訪問され、数名の奨学生を支援してくださってます。息子さんの栄介くんも数カ月滞在。その後、しばしば原宿でチャリティーイベントを開いてＭＣＬを助けてくださっています。「Ｌｅｅｌａ」という名のお店を恵比寿でなさっています。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、採用の基準は成績ではなく、親のいない孤児片親の子、崩壊家庭の子、そして親はいても兄弟姉妹が多く、自給地もなく、３食たべるのも難しいような貧困家庭の子どもたちです。

現在スカラシップの子どもたちは、６２０名ほど。中には戦闘で両親を殺されたり。アビューズの対象になっていたりする子も多く、現地に置いておけない子どもたちは、ＭＣＬの本部に住めるようにしてあげています。その数が、１００名強。大勢ですが、一つの家族として一緒に食事をしたがります。そのご飯を作る台所を寄贈してくださったのが、北九州小倉ライオンズクラブの方々、そして土肥基さま 大久保一興さま、濱田博さま。皆さん本当にありがとうございます！

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

日本から訪問してきた若者たちとアポ山（2950m）に登った

4月5月は、ミンダナオの夏休み。この時期に、高校生と大学生を中心に、フィリピンの最高峰、アポ山に登ることにしている。

ジャングルに囲まれているアポ山は、3千メートル弱のフィリピンの最高峰だが、日本の高山のようにアプローチや山道が整備されているわけでもないので、ガイドとポーターを雇って、三泊二日で頂上をきわめる。今回も、ガイド役になってくださったのは、マノボ族の奨学生のお父さんたち。日本の若者二人を含めて、一八人の精鋭部隊。

アポ山は、図書館の裏山なのだが、人々にとって神々の庭、神聖な山で、若者たちの強い憧れ。若い時に一度でも、フィリピン最高峰に登ったという体験は、生涯彼らの自信と誇りとなるだろう。そのこともあり、毎年計画している。

日本から来た彼女たち（写真）は、ほとんど山を登った体験のない若者たちで、最初はちょっと心配したけど、MCLの若者たちが助け、時にはおんぶして川を渡り、荷物も喜んで運び上げ、最後はすっかり仲良しになって、曰く。

「すっかり山登りにはまってしまった。また絶対来るかね！」

集団的自衛権は、NGO活動を危機に落とす。

日本に滞在中に最も気になる動きは、憲法9条をめぐる動きだ。特に、集団的自衛権は、NGO活動をしてきた者にとっては、本当に恐ろしい動きだ。正直に言って、日本が集団的自衛権を主張して、海外に軍隊を送ることが可能になると、われわれの活動地域での危険は、数十倍にふくれあがるだろう。

ぼくらが、100万の難民が出るような戦闘の合間を縫い、また反政府ゲリラの地域でも、読み聞かせや医療、スカラシップの活動が、比較的安全に出来るのは、日本が、世界にたぐいまれな憲法9条を持ち、決して海外派兵をしないという、素晴らしい平和憲法を持っているからだ。

それ故に、人々は、日本人を尊敬し、過去の過ちがあったとしても、現在は心を開いて受け入れてくれる。米国人の場合は、フィリピン軍と米軍のバリカタンという合同演習、そしてテロリスト掃討作戦がブッシュ政権時代あり、2000年、2002年に100万の難民を出した。

また、2008年の和平交渉決裂のおりも、米軍の無人偵察機が飛び交い、その他のことで、現地では米軍が米軍＝大規模戦闘の開始と解釈し、恐れられている。それに、日本も集団的自衛権を建前に、日本軍が参加する可能性があるとしたならば、それだけで、現地の人々の日本人への目が変わってくる。それゆえに、警戒もされ、第二次世界大戦中の行動に対する記憶も手伝って、われわれNGO関係者を警戒し、場合によっては誘拐殺害する可能性がダントツに高まる。

ぼくは最近、少しづつだが、現地の人々の日本に対する意識の変化を感じ取る。集団的自衛権は、NGO関係者を危機へと追い込むだろう。

現地で長年活動してきた者には、恐怖以外の何物でもない。

郵便振替口座番号　00100　0　18057
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

童話：山菜売りの少女（続き）

ボス

ボスというのは親分のことだけど、わたしたちには、どんな人かわからなかったの。

ストリートチルドレンの親分って、どんな人だろう。なんだか怖い人を想像していると、少年の一人が、国道の反対側にある銀行を指さしていった。

「ほら、あそこにいるよ。」

親分が銀行の持ち主だったら、きっとお金持ちなんだろうなあ。そう思って、山菜売りの少女たちは、ストリートチルドレンたちの後についていった。

男の子たちは、入り口までくると、銀行の中には入らずに、そばの路上にすわっている男の方へと近づいていった。

男は、片手を前にさしだしては、物乞いをしている。顔はあさ黒く、口のまわりはひげだらけで、あごひげはのびっぱなし。お腹のあたりまでたれている。服はボロボロ、胸のあたりは、はだけて半分はだか。ズボンも破れて穴だらけ。靴もはかずに裸足だし、体から臭いにおいもぷんぷんしてくる。

男は、半分眠っているような、トロンとした目をしていたけれども、ストリートチルドレンたちが駆けよっていくと、ゆっくりと顔をあげた。そして後から、山菜売りの少女がついてくるのを見たときに、男の目は、キラリと光った。

物乞いをしている浮浪者の前に、少年たちは立つと、一番年上のクリスティンを抱きかかえて助けてくれた、大柄な男の子が言った。

「ボス、つれてきたよ。」

男は、まるでギンギンたちを、心から待っていたかのように、おだやかにほほえんだ。

「ミンダナオ子ども図書館に行きたいんだって。ボスなら知っているよね。」

浮浪者は、膝を立てて座りなおすといった。

「もちろんだとも。わしの親戚の子たちも何人か、あそこに住んでいるからね。アオコイ酋長とは、友だちだ。」

アオコイという名前を聞いて、ギンギンはいった。

「酋長って、わたしたちと同じマノボ族なの？だって、アオコイってマノボ語で、友だちって意味だもん。」

浮浪者は、いっしゅん言葉につまってからいった。

「純粋なマノボ族じゃあ、ないんだが、マノボの酋長であることは、確かだよ。あそこには、たくさんのマノボの子どもたちが住んでいる。とりわけ、親の無い子や片親の子がたくさんね。イスラム教徒やキリスト教徒も、みんないっしょに仲よく暮らしている。

昔のマノボの村は、あんな感じだったんだが・・・。」

「世界中が、昔のマノボの村のようになったら、戦争なんてないのにな あ。」

ストリートチルドレンの一人が、ため息混じりにいった。

年上の男の子が、政治家が演説する調子をまねて、おどけていった。

「戦争も貧困もなく、平等で、とりわけ子どもとお年寄りが、幸せに生きることが出来る社会を実現しよう！」

浮浪者は、横に置いてあった木の棒を杖がわりにして、よっこらしょ、っと立ちあがると、いった。

「昔のマノボは、だれもオレたちの家だ、なんて言わずに、家のない人や親の無い子がいれば、家族のように迎えて、いっしょに暮らした。ここはオレの土地だから、おまえたちは出て行け、などといわないで、食べ物がなければ喜んで土地をあけて、野菜を植えさせてくれたものだ。

わしが、子どもだった頃はなあ。」

浮浪者は、山菜売りの少女とストリートチルドレンたちに、自分のあと

についてくるようにいって、歩きはじめた。

「お金のない社会は良いもんじゃった。」

ボロボロの服を着た浮浪者のあとを、汚れたストリートチルドレンたちがつづき、そのあとに頭に黒いタライをのせた山菜売りの少女たちがつづく。

今まで無関心だった人々も、このときばかりは、ちょっとビックリした顔をして、子どもたちをながめた。車も、スピードをゆるめて、なかには、わざわざ窓を開いて、声をかけて通り過ぎる運転手もいる。トライシクルの座席からも、大人や子どもたちが、身を乗りだしてながめている。

こうして、浮浪者につれそわれた子どもたちは、目的地のマノンゴル村についた。

ミンダナオ子ども図書館

マノンゴルの村にはいると、小さな教会があって、その前を少しくだると、小川が流れていた。

小川をわたって、家々のあいだをぬけ、でこぼこ道を少し行くと、果樹園の緑のなかに、ミンダナオ子ども図書館の青いトタン屋根が見えた。入り口のところには、大きなファイアーツリーが、まっ赤な炎のような花をつけている。

近づいていくと、たくさんの子どもたちの声が聞こえてきた。

広い敷地には、とくに壁らしいものもなにもない。建物は、思っていたよりもずっと大きく横長で、鳥が飛びたつような格好をしている。

家の前は、かんぼくに囲まれた緑の庭。そこでは、たくさんの子どもたちが、鬼ごっこをしたり、花いちもんめをして遊んでいる。歓声が聞こえてくる。

ファイアーツリーの下をとおったとき、ギンギンは、町でシンカマス（砂糖大根）を売っていた、お母さんの話を思いだした。

「ここに住んでいるのは、おもに父さんや母さんがいない子たちなのよ。」

すると、声が聞こえてきた。

「それだけじゃないよ。親はいても、何ヶ月もでかせぎでサトウキビ刈りをしたり、田んぼの草刈りやゴム農園で、働かなくてはいけなかった子どもたちもいるよ。まだ小学生なのに。」

ファイアーツリーのこずえに咲いている、まっ赤な花たちが、話しかけてきたような気がして、ギンギンは上を見あげた。

ギンギンは、こたえた。

わかるよ、それ。わたしたちもそうだけど、子どもでも、食べるためには、学校なんかいかないで、働かなければならないのよ。

「食べものが見つからなくなって、お父さんやお母さんが、逃げてしまった子たちもいるよ。」

わたしもしってる。その子、行く場所がなくなって、親戚や知りあいを、たらい回しになっていたわ。学校になんか行かせてもらえなくて、豚の世話や、便所掃除をやらされていた。ここにいる子たちは、そんなところから来た子たちなんだ。

庭で鬼ごっこをしていた子たちが、ギンギンたちが入って来たのを見ていった。

「だれかきたよ。」

庭で遊んでいた子どもたちは、訪れてきた人たちのほうをみやった。

ボロボロの服を着た、ひげだらけの浮浪者と七人のストリートチルドレン、それに頭にタライをのせた三人の山菜売りの少女が、ファイアーツリーのしたに立っている。

（続く）

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には年五回、３、６、８、１０、１２月に季刊誌『ミンダナオの風』と時に作成した絵本やＤＶＤをお送りしています。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。年間１４０名を超える子どもたちの医療費、支援者のまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費（現在200名弱）、ＭＣＬ本部、下宿小屋の子どもたちの食費や生活費（ほぼ２００名）。読み聞かせなどの活動費に使われます。しかし、生活の厳しい日本の方々の場合、無理をなさらないでください。機関誌を読むだけで生きがいになるという方も多く、寄附がなくとも喜んでいただけるのでしたらお送りします。不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準としています。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み生活を保障し近くの学校に大学まで通えます。奨学生は現在６２０名。本部に住む子は100名を超えています。

１，大学生スカラシップ・・年額７００００円　（内容は高校生と同じ）

２，高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円
振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、年５回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、６月に成績表、８月に写真、１２月に新年カードが届きます。新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、８月に写真、１２月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。訪問の際は自宅にご案内。
プレゼントも可能ですが、僻地のため、返事は半年ほど後になる可能性があります。

その他の支援

１、保育所・下宿小屋建設支援・・・４０万円（資材高騰と建設後の修理代を加えました）
振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年五回季刊誌と同時に、１０月には毎年現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。数年ごとに修復。

２，植林環境支援・・・６万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代を加えました）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、機関誌停止その他に関する問合せは、
メール mcl.v.staff@gmail.com（日本人現地スタッフ）
Fax

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines